原　著

乳幼児をもつ父親の Quality of life と構造的にみた関連要因

Structural analysis of the fathers' quality of life during child-rearing

高城智圭[1)]、星　旦二[2)]
Chika TAKAGI[1)], Tanji HOSHI[2)]

[1)] 杏林大学保健学部，[2)] 首都大学東京都市環境科学研究科
[1)] Kyorin University, [2)] Tokyo Metropolitan University

【目　的】

本研究は乳幼児を育てる父親の QOL と関連する要因と、その関連要因について構造的に明らかにすることを目的とする。

【方　法】

第 3 回全国家族調査（以下、NFRJ08）の若年調査対象者のうち、0 ～ 5 歳の子どもをもつ男性 290 人を分析対象とした。

「父親の QOL は家事育児役割、夫婦の関係性、夫婦の満足度と関連する」と仮説を立て『夫婦の関係性』（『』は潜在変数を示す）、『夫婦の満足度』、『家事育児役割』、『QOL』の 4 つの潜在変数の関連構造を探るために共分散構造分析を行い、最適モデルを探索した。

【結　果】

『夫婦の関係性』が基盤となり、『夫婦の関係性』から『QOL』、『夫婦の満足度』への標準化直接効果はそれぞれ 0.22、0.64、『夫婦の満足度』から『QOL』への標準化直接効果は 0.58、『夫婦の関係性』から『夫婦の満足度』を経由した『QOL』への標準化間接効果は 0.37 であった。よって、父親の QOL 関連構造は夫婦の関係性が基盤となり、夫婦の満足度を経由して間接的に QOL に関連していることが明らかとなった。

配偶者の就労の有無別に多母集団同時分析を行った結果、『夫婦の関係性』から『家事育児役割』への標準化直接効果は就労あり群が就労なし群よりも統計学上有意に高い値を示した。

本モデルの適合度は RMSEA=0.052、NFI=0.868、CFI=0.937、TLI=0.920、決定係数は 0.58 であった。

【考　察】

父親の QOL は、夫婦の関係性が基盤となり、夫婦の満足度を経由して、QOL を高める方向に影響する可能性が示唆された。また、母親の就労の有無は父親の QOL 関連構造に影響する可能性が示唆された。

本研究結果の内的、外的妥当性を高めることが今後の研究課題である。

【Purpose】

The purpose of this study was to clarify the structure of factors affecting fathers' quality of life (QOL).

【Methods】

The subjects were 290 fathers who had taken care of 0- to 5-year-old children. Four factors: "marital relationship", "marital satisfaction", "QOL" and "housework and child-rearing role", were set as latent variables. It was hypothesized that the QOL was associated with housework, the child-rearing role, marital relationship, and marital satisfaction. This was examined using covariance structure analysis employing SPSS19.0J and Amos 19.0J for Windows.

【Results】

The model showed that “marital relationship” was a fundamental factor.

The “QOL” was directly affected by the “marital relationship”, with a standardized estimate of 0.22, and by “marital satisfaction”, with a standardized estimate of 0.64. The “QOL” was indirectly affected by “marital relationship” through “marital satisfaction”, with a standardized estimate of 0.37. This model showed differences depending on whether or not the mothers worked. The standardized estimate for “marital relationship” and “housework and child-rearing role” showed higher scores for working than non-working mothers. Goodness-of-fit scores with the model were: RMSEA=0.052, NFI=0.868, CFI=0.937, and TLI=0.920, and the coefficient of determination for the “QOL” was 58%.

【Discussions】

It was suggested that a favorable marital relationship improved fathers’ QOL through marital satisfaction, and mothers’ employment status may also have an influence. Future studies are needed to develop a model with higher internal and external validity.

キーワード：乳幼児期　父親　家事育児役割　夫婦の関係性　夫婦の満足度

Key words：Child rearing period, father, housework and child-rearing role, marital relationship, marital satisfaction

Ⅰ　はじめに

我が国では平成 9 年、共働き世帯数が専業主婦世帯数を上回って以来、その数は増加の一途をたどっている[1)]。このことは女性の社会参加が増加し、「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割意識の変更を余儀なくされ、男性が家事育児役割を担う必要性が高まっていることを示している。

内閣府も「イクメンプロジェクト」を立ち上げ、男性の積極的な育児参加を促している。しかし育児休業を希望する男性は 30% 以上である[2)]のに対し、その取得率は 2011 年では 2.6% であり、目標と実態がかけ離れているのが現状である[3)]。また、未就学児をもつ父親の 51.6% が仕事と育児を重視したいと思っているとの報告がある[4)]一方で、2010 年の調査によると 6 歳未満児のいる男性の家事育児時間は一日当たり約 1 時間と、諸外国と比較し極端に短いのが現状である[5)]。よって、男性が家事育児役割を担うには、育児休業を取得しやすくしたり、育児時間を確保できるような企業や社会の理解の促進という環境整備が必要不可欠であることが考察される。また、平成 11 年に制定された男女共同参画社会基本法に示されている男女共同参画社会とは、仕事と家庭のバランス、すなわちワークライフバランスの実現の先にひとりひとりの豊かな人生をめざすものとされている[6)]。これを乳幼児期の父親に当てはめて考えると、企業や社会の環境整備だけでなく、家事や育児への参加が父親自身の生きがいや充実感、生活満足感といった Quality of life（以下、QOL）の向上につながるような支援が求められているといえるだろう。しかしながら、父親の QOL の関連要因に関する先行研究は十分ではなく、父親の育児参加が QOL とどのように関連しているのかも明らかではない。

父親の育児参加に関する研究は、父親の育児参加を規定する要因に関する報告と、父親の育児参加が母親の育児ストレスや子どもの成長発達、夫婦関係という家族構成員や家族の関係性に影響を与えるとする報告に大別できる。前者の父親の育児参加を規定する要因として、父親自身の役割観、母親からの積極的な働き掛け、仕事と家庭の多重役割の捉え方が報告されている[7～9)]。後者の父親の育児参加が家族に与える影響については、子どもへの影響、母親への影響、そして夫婦関係への影響がある。子どもへの影響については、Aldous[10)]らが父親とポジティブな関わりをもつ男児の問題行動は少ないことを報告し、加藤ら[11)]は父親が育児をする子どもは、情緒的・社会的発達がよいことを報告している。このように国内外で、父親の育児参加は子どもへポジティブな影響を与えていることが明らかとなっている。また、母親への影響として、細野[12)]は父親による母親へのサポートは母親の育児ストレス軽減につながること、小林[13)]は父親のサポートが多いほど母親の抑うつ得点が低いことを報告し、さらに荒牧[14)]は父親のサポートを多く受けている母

親は育児への肯定的感情が高いことを報告しており、父親の育児参加は、母親の精神的健康の維持向上に対してよい影響を与えていることが明らかとなっている。一方、父親の実際のサポートよりも父親の育児参加を母親自身がどのように受け止めているか、そのギャップの大きさが母親の精神的健康に重要であるとする報告もある[15]。父親の育児参加と夫婦関係については、父親の育児参加が母親の夫婦満足度と有意に関連する[16]という報告と、父親の育児参加は母親の夫婦満足度と有意な関連を示さない[17]という相反する報告があるが、父親の育児参加と夫婦関係との関連については、父親の家事育児参加だけでなく、母親の期待水準と実態とのズレの程度を考慮することの有用性も示されており[18]、母親の期待度や認識を含めて分析する必要があると言える。また、父親の育児参加は夫婦関係を良好にし、そのことが子どもの成長発達を促すこと[19]や、夫婦関係と幼児の精神面の不安定さが有意に関連すること[20]も報告されており、間接的に子どもの成長発達に影響することが明らかとなっている。

このように、父親の育児参加は子どもや母親、夫婦関係に影響を与えることが明らかになっているが、先行研究の調査の回答者は母親であることが多く、父親自身の回答によるものは少ない。さらに、父親自身については親性の発達という視点以外に、QOL などのポジティブな視点を含んだ報告は少ない。諸外国においては Chen ら[21]により育児と QOL は正の関連があることが報告されているが、その他の多くはガンなどの病気や障害をもつ子どもの親を対象としたものであり、健常児の親を対象とした研究はほとんど報告されていない。さらに国内では父親の育児参加が家族への貢献感を経て健康 QOL を高める可能性を示した朴ら[22]による報告のみである。

このように父親の育児参加と QOL との関連の先行研究は十分ではなく、さらに、夫婦関係を含めた構造的な関連は明らかになっていない。

育児参加と夫婦の関係性を含んだ父親の QOL の関連構造が明らかになることは、父親を支援する上で求められる科学的なエビデンスが明らかになることであり、その意義は高いと言える。

Ⅱ　目　的

本研究は乳幼児を育てる父親の QOL と関連する要因について、その関連要因を構造的に明らかにすることを目的とする。

Ⅲ　研究方法

1. 調査対象

日本家族社会学会が実施した第 3 回全国家族調査（以下、NFRJ08）対象 9,400 人（回収 5,203 人、回収率 55.4%）のうち、28 ～ 47 歳の若年調査の対象者 2,209 人とした。

2. 調査方法と調査時期

訪問留置き法により自記式質問紙調査を行った。調査時期は 2009 年 1 ～ 2 月である。

3. 分析対象

NFRJ08 の若年調査 2,209 人のうち、0 ～ 5 歳の子どもをもつ男性 290 人を分析対象とした。

4. 調査項目

分析に用いた項目は、先行研究を参考に、属性（性別、仕事の有無･内容、年収、学歴）、夫婦の会話量（平日＋休日の時間）・夫婦の関係性・夫婦の満足度、家事育児役割、主観的健康感、生活満足感、心と体の状態（「毎日が楽しい」）である。夫婦の満足度は「子育てに対する配偶者の取り組み方［以下、満足 1］」「家事に対する配偶者の取り組み方［満足 2］」「夫婦関係全体［満足 3］」の 3 項目 4 件法、夫婦の関係性は「配偶者は私の心配事や悩み事を聞いてくれる［関係性 1］」「配偶者は私の能力や努力を高く評価してくれる［関係性 2］」「配偶者は私に助言やアドバイスをしてくれる［関係性 3］」の 3 項目 4 件法、夫婦の会話量（平日＋休日）、家事育児役割は「食事の用意［家事 1］」「食事の後片付け［家事 2］」「食料品や日用品の買い物［家事 3］」「洗濯［家事 4］」「掃除［家事 5］」「子どもと遊ぶ［育児 1］」「子どもの身の回りの世話［育児 2］」の 7 項目 5 件法である。本分析では QOL 項目として「生活に満足している［生活満足度］」（4 件法）、「（心と体の状態）この 1 週間のうち毎日が楽しいと感じたこと［毎日が楽しい］」（4 件法）、「健康である［健康状態］」（5 件法）の 3 項目を用いた。

5. 分析方法

生活満足感、夫婦の満足度、関係性、会話量、家事育児役割の項目を用いて、生活満足感とそれぞれの項目との関連について Kendall τ 検定を行い、確認した。

その後、探索的因子分析を行い、「父親の生活満足感は、家事育児役割、夫婦の関係性、夫婦の満足度と構造的にみた関連がみられる」と仮説を立て、共分散構造分析を行った。属性などによる差異は、多母集団同時分析を行った。有意水準は $p<0.05$ とした。各尺度の信頼性は、cronbach α 係数を用いた。分析には、SPSSver.19.0、Amos19.0 for windows を用いた。

Ⅳ 結 果

1. 分析対象者の属性（表 1）

分析対象者の平均年齢は 35.6 歳（SD4.4）であった。子どもの人数は 1 人が 82 人（28.3%）、2 人が 152 人（52.4%）、3 人以上が 56 人（19.3%）であった。最終学歴は中学校・高等学校 115 人（39.7%）、専門学校 58 人（20.0%）、大学以上が 110 人（37.9%）であり、年収は 300 万円以下が 37 人（12.8%）、300 ～ 600 万円以下が 162 人(55.9%)、600 万円以上が 87 人(30.0%)であった。配偶者の就業がある人は 123 人（42.4%）、配偶者の就業がない人は 162 人（55.9%）であった。

表 1　分析対象者の属性

(n=290)

			人数	%
父親	年齢	平均35.6（SD4.4）歳　range28-47歳		
	最終学歴	中学校/高等学校	115	39.7
		専門学校/短大	58	20.0
		大学以上	110	37.9
		無回答	7	2.4
	就業の有無	就いている	280	96.6
		休職中	2	0.7
		就いていない	4	1.4
		無回答	4	1.4
	就業形態	常時雇用	243	83.8
		臨時雇用	13	4.5
		自営業	29	10.0
		非該当	4	1.4
		無回答	1	0.3
年収		300万円以下	37	12.8
		300～400万円以下	48	16.6
		400～500万円以下	64	22.1
		500～600万円以下	50	17.2
		600～800万円以下	57	19.7
		800万円以上	30	10.3
		無回答	4	1.4
子どもの人数		1人	82	28.3
		2人	152	52.4
		3人	46	15.9
		4人	10	3.4
配偶者の有無		配偶者あり	286	98.6
		配偶者なし	4	1.4
配偶者の就業状況		就労あり	123	42.4
		就労なし	162	55.9
		無回答/非該当	5	1.7

2. 夫婦の関係性について

配偶者との平日の会話時間は、1 時間未満が 173 人（59.7%）、2 時間以上が 37 人（12.8%）であり、休日の会話時間は 1 時間未満が 83 人（28.6%）、2 時間以上が 127 人（43.8%）であった。

夫婦の関係性については、「配偶者は私の心配事や悩み事を聞いてくれる」に「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した人は 244 人（84.1%）、「配偶者は私の能力や努力を評価してくれる」に「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した人は 229 人（78.9%）、「配偶者は私に助言やアドバイスをくれる」に「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した人は 231 人（79.7%）であった。

3. QOL 3 項目について

主観的健康感として「健康であると思うか」と尋ね、「大変良好」「まあ良好」と回答した人は 213 人(73.4%)、「どちらともいえない」は 50 人（17.2%）、「やや悪い」「たいへん悪い」は 27 人（9.3%）であった。

生活満足感として、「生活に満足しているか」と尋ね、「かなり満足」「どちらかといえば満足」と回答した人は 238 人（82.0%）であった。

こころとからだの状態として、「この 1 週間、毎日が楽しいと思ったか」と尋ねた。「ほとんど毎日」「週に 3 ～ 4 日」と回答した人は 124 人（42.8%）であり、「週に 1 ～ 2 日」は 106 人（36.6%）、「全くなかった」は 60 人（20.7%）であった。

4. 家事育児役割について（表 2）

家事役割は、食事の用意や食事の後片付け、洗濯、掃除は、「ほとんど行わない」と回答した人がそれぞれ 196 人（67.6%）、142 人（49.0%）、202 人（69.7%）、134 人（46.2%）と最も多く、家事の中でも、買い物は「週に 1 回くらい行う」と回答した人が 131 人(45.2%)であり、他の家事項目の中よりは役割を担う回数が多かった。一方、育児役割で子どもと遊ぶことを「ほぼ毎日」「週に 4 ～ 5 回」行うと回答した人は 124 人（42.7%）、「週に 1 回くらい」「「ほとんど行わない」と回答した人は 65 人（22.4%）であった。子どもの世話をすることを「ほぼ毎日」「週に 4 ～ 5 日」行うと回答した人は 84 人（28.9%）であったが、「週に 1 回くらい」「ほとんど行わない」と回答した人も 114 人（39.4%）みられた。

表２　家事育児役割の回数

		人数	(%)
［家事１］	ほぼ毎日	5	(1.7)
食事の用意	1週間に4～5回	9	(3.1)
	1週間に2～3回	28	(9.7)
	週に1回くらい	42	(14.5)
	ほとんど行わない	196	(67.6)
［家事２］	ほぼ毎日	22	(7.6)
食事の	1週間に4～5回	19	(6.6)
後片付け	1週間に2～3回	38	(13.1)
	週に1回くらい	60	(20.7)
	ほとんど行わない	142	(49.0)
［家事３］	ほぼ毎日	2	(0.7)
買い物	1週間に4～5回	7	(2.4)
	1週間に2～3回	43	(14.8)
	週に1回くらい	131	(45.2)
	ほとんど行わない	98	(33.8)
［家事４］	ほぼ毎日	19	(6.6)
洗濯	1週間に4～5回	3	(1.0)
	1週間に2～3回	18	(6.2)
	週に1回くらい	38	(13.1)
	ほとんど行わない	202	(69.7)
［家事５］	ほぼ毎日	10	(3.4)
そうじ	1週間に4～5回	6	(2.1)
	1週間に2～3回	34	(11.7)
	週に1回くらい	95	(32.8)
	ほとんど行わない	134	(46.2)
［育児１］	ほぼ毎日	81	(27.9)
子どもと遊ぶ	1週間に4～5回	43	(14.8)
	1週間に2～3回	96	(33.1)
	週に1回くらい	53	(18.3)
	ほとんど行わない	12	(4.1)
［育児２］	ほぼ毎日	54	(18.6)
子どもの世話	1週間に4～5回	30	(10.3)
	1週間に2～3回	83	(28.6)
	週に1回くらい	57	(19.7)
	ほとんど行わない	57	(19 7)

5. 生活満足感と各項目との関連

生活満足感と夫婦の関係性、会話量、夫婦の満足度、父親の家事育児役割、主観的健康感、心と体の状態（毎日が楽しい）との関連を Kendall τ 検定で確認した結果、生活満足感と夫婦の関係性、会話量、夫婦の満足度、主観的健康感、（心と体の状態）毎日が楽しいとの間に統計学上有意な関連が示されたが、父親の家事育児役割においては、［育児 1］のみ生活満足感と統計学上有意な関連がみられた。また、社会経済的要因として、年収と生活満足度の間には統計学上有意な関連がみられたが、学歴、配偶者の就業の有無と生活満足感との間には統計学上有意な関連は示さなかった。

6. 父親の QOL 関連構造モデル

夫婦の関係性 3 項目、会話量、夫婦の満足度 3 項目、父親の家事育児役割 7 項目、主観的健康感 1 項目、生活満足感 1 項目、心と体の状態 1 項目の 17 項目について探索的因子分析を実施した。その結果、表 3 に示すとおり 4 因子が抽出された。

探索的因子分析の結果を参考に、χ^2 検定の結果から QOL と関連すると考えられる項目を追加し、4 つの潜在変数を設定した。「育児 1」を追加した「父親の家事育児役割 1 ～ 7」7 項目からなる『家事育児役割』（「」は観測変数、『』は潜在変数を示す）、「関係性 1 ～ 3」の 3 項目と「会話量」1 項目の合計 4 項目からなる『夫婦の関係性』、「夫婦満足感 1 ～ 3」の 3 項目からなる『夫婦満足感』、「主観的健康感」「生活満足感」に「毎日が楽しい」を追加した 3 項目からなる『QOL』である。潜在変数の cronbach α 係数は、『家事育児役割』0.934、『夫婦の関係性』0.510、『夫婦満足感』0.786 と高かったものの、『QOL』は 0.411 と低い値であった。

表３　探索的因子分析結果

	因子			
	1	2	3	4
家事１	**.934**	-.001	.015	-.005
家事４	**.898**	-.027	-.012	.025
家事２	**.894**	.022	-.004	-.008
家事５	**.817**	-.006	.002	.014
育児２	**.799**	.063	-.005	-.014
家事３	**.754**	-.005	-.010	-.001
関係性１	.000	**.913**	-.038	-.067
関係性３	.014	**.851**	-.023	-.042
関係性２	-.064	**.800**	-.062	.034
会話量合計	.137	**.395**	.114	.021
夫婦満足１	.052	-.007	**.891**	-.025
夫婦満足２	-.147	.025	**.676**	-.046
夫婦満足３	-.020	.331	**.417**	.116
生活満足度	-.013	.030	-.020	**.910**
主観的健康感	.024	-.056	-.024	**.413**
累積％	33.365	54.021	59.453	62.940
cronbach α 係数	0.737	0.510	0.786	0.503

4 つの潜在変数を用いて、最適モデルを探索した結果、図 1 に示す適合度の高いモデルが得られた。本モデルの適合度は RMSEA=0.052、NFI=0.868、CFI=0.937、TLI=0.920、決定係数は 0.58 であった。『夫婦の関係性』から『QOL』への標準化直接効果は 0.22、『夫婦の満足度』から『QOL』への標準化直接効果は 0.58 であり、いずれも有意であった。『夫婦の関係性』から『夫婦の満足度』を経由した『QOL』への標準化間接効果は 0.37 であり、『家事育児役割』を経た標準化間接効果は 0.03 であった。

本モデルを用いて、配偶者の就業の有無別に多母集団同時分析を行った結果、『夫婦の満足度』から『家事育児役割』への標準化直接効果は就労あり群が 0.31、就労なし群は−0.34 であり、配偶者の就労あり群が就

労なし群よりも統計学上有意に大きな値を示した。また、『夫婦の関係性』から『家事育児役割』への標準化直接効果は、就労あり群が−0.175、就労なし群が 0.311 であり、就労なし群が統計学上有意に大きな値を示した。さらに、『夫婦の関係性』から『夫婦の満足度』を経由した『QOL』への標準化間接効果は、就労あり群 0.62、就労なし群は 0.26 であり、就労あり群が大きな値を示した（表 4）。就労あり群、就労なし群のそれぞれの決定係数は、0.83、0.44 であった。

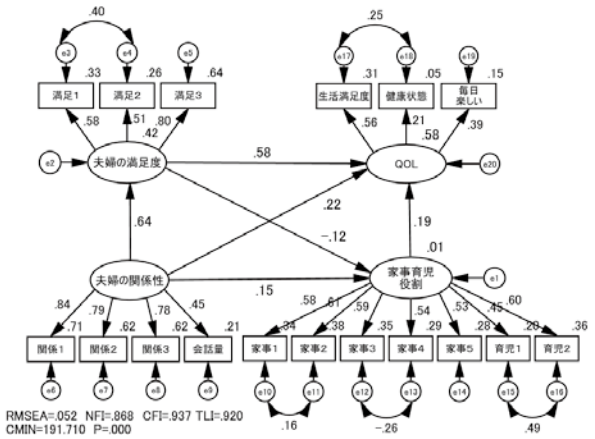

図 1　父親の QOL 関連要因モデル

表 4　標準化直接・間接・総合効果

				配偶者就労の有無		一対比較
				就労あり	就労なし	
［標準化直接効果］	夫婦の関係性	→	夫婦の満足度	0.711	0.608	n.s.
		→	家事育児役割	−0.175	0.311	＊
		→	QOL	0.004	0.321	n.s.
	夫婦の満足度	→	家事育児役割	0.308	−0.344	＊
		→	QOL	0.863	0.414	n.s.
	家事育児役割	→	QOL	0.163	0.116	n.s.
［標準化間接効果］	夫婦の関係性	→	家事育児役割 → QOL	0.219	−0.209	
		→	夫婦の満足度 → QOL	0.621	0.264	
［標準化総合効果］	夫婦の関係性	→	→ → QOL	0.625	0.585	

＊：p<0.05

V　考　察

以上の結果を踏まえて、1. 父親の QOL 関連要因について、2. 今後の研究課題について考察する。

1. 父親の QOL 関連要因について

本研究結果から、父親が家事育児役割を担うことと父親の QOL は統計学上有意な関連が見られないことが示された。朴ら[22]は、育児役割のみを取り上げ、育児役割が他者貢献感につながり、健康 QOL を高めることを報告していた。本研究は役割の一つとして家事も含めて取り上げた点は異なるが、家事育児役割が QOL と直接関連しないという点は、朴らの先行研究の結果を支持したといえる。

『夫婦の満足度』から『家事育児役割』への標準化直接効果は、−0.12 であり負の効果を示した。これは、夫婦の満足度が高いほど、母親が家事育児役割を担う回数が増え、それに伴い父親の家事育児役割が減少している可能性が考察され、その再現性が求められる。

また本研究結果では、夫婦の関係性が直接に QOL を高めるよりも、夫婦の関係性から夫婦の満足度を経由した間接効果の方が大きいことが明らかとなった。すなわち、夫婦の満足度を高めるような夫婦の関係性が基盤となり、それが QOL を高める可能性があることが示唆された点が研究の新規性である。本研究で扱った夫婦の関係性は、話を聞いてくれる、評価してくれることや会話量など、情緒的サポートともいえる内容である。伊藤ら[23]は、配偶者からの情緒的なサポートの有無が疎外感などの心理的健康に影響することを報告しているが、本研究からも情緒的サポートが QOL の基盤となることが示唆され、伊藤ら[23]の先行研究を支持した。さらに母親を対象とした先行研究からは、父親の直接的な家事育児参加よりも情緒的サポートが母親の夫婦満足感と関連すること[24]が報告されているが、父親についても配偶者の情緒的サポートが重要であることが示唆された。

また、父親にとって配偶者（母親）の就労の有無は、家事育児役割を担う回数に影響を与え、それが QOL へも影響する可能性があることが示された。夫婦の満足度が高いことは、配偶者が就労している場合、父親が家事育児役割を担う回数は増えるが、配偶者が就労していない場合は、家事育児役割を担う回数が少なくなることが示唆された。この背景には、性別役割意識の影響もあるのではないかと考えられる。都市部在住の女性を対象にした高らの調査[25]では、無就労の場合、配偶者のサポートがある方が生活満足感が低くなることが報告されており、この研究結果からは無就労の女性の場合は性別役割意識が強く働き、性別役割意識が男性の家事育児役割を阻害しているとも考えられる。内閣府が行っている性別役割分担意識の変化の経年的調査[26]では、平成 21 年までは減少傾向であったとはいえ、性別役割分担を賛成、どちらかといえば賛成とするものが、女性 48.4%、男性 55.1% になる。「男性は仕事、女性は家庭」の意識が強いと、特に母親が専業主婦の場合、家事育児は女性が担って当然とする認識が女性、男性ともにあることは否めない。また、杉山ら[27]の文献研究からは、性別役割意識をもつ父親に対しては、父親の家事育児参加は母親からの積極的な働きかけが必要であることが明らかとなっているが、これは母親自身の性別役割意識が、父親の家事育児役

割の促進・阻害要因になるとも言い換えることができる。諸外国では性別役割意識と父親の育児参加の相関は低いという報告[28]や、日本では性別役割意識は父親の育児参加に影響を与えないとする報告もある[29]が、再現性が求められる。

男性が家事育児役割を担い、それが QOL の向上につながるには、夫婦がゆっくり会話できるような時間を確保することや、互いを評価できる関係性が重要である可能性が示唆されたが、このことから男性自身への支援だけでなく、女性も含めた、家庭や社会全体の意識の変化を促すようなアプローチが必要になることが推察される。

2. 今後の研究課題

本調査は横断調査であり、本研究結果は因果関係を明らかにしたものではない。縦断調査により因果関係を明らかにすることが今後の研究課題である。さらに、本研究結果の内的、外的妥当性を高めることも今後の研究課題である。また、今回の分析では、夫婦の関係性と満足度、家事育児役割が QOL とどのように関連するかを明らかにしたのみで、仕事と家庭のバランスに関する項目は含まれていない。しかし、成瀬ら[30]は父親の育児支援行動と仕事と家庭における役割の関係性との関連を明らかにしており、父親が仕事と家庭の両立をどう捉えているのかは QOL に関連するものと考えられる。仕事と家庭のバランスに関する項目を含めた分析をすすめていくことも今後の課題である。さらに、夫婦関係はその認知のズレが夫婦満足感や母親のストレスに影響を与える[15, 17, 31]ことから、父親と母親のマッチング調査を行い、認知のズレも含めた分析をしていくことも今後の研究課題である。

【謝　辞】

本研究の分析に用いたデータは、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから第 3 回全国家族調査（NFRJ08）(日本家族社会学会全国家族調査委員会）の個票データの提供を受けました。感謝いたします。

【参考文献】

1）内閣府男女共同参画局．男女共同参画白書平成 24 年版．79. 2012.
2）厚生労働省．今後の仕事と家庭の両立支援に関する研究会報告書．12. 2008.
3）内閣府男女共同参画局．男女共同参画白書平成 24 年版．84.2012.
4）UFJ 総合研究所．子育て支援等に関する調査研究報告書．23.2003.
5）内閣府男女共同参画局．男女共同参画白書平成 24 年版．83.2012.
6）内閣府男女共同参画局 HP．http://www.gender.go.jp/about_danjo/society/index.html.（2013 年 8 月 13 日アクセス）
7）藤原千恵子，日隈ふみ子，石井京子．父親の育児家事行動に関する横断的研究．小児保研究．56(6) 794–800.1997.
8）川上あずさ，牛尾禮子．父親の育児に対する役割要因に関する要因とその支援方略．小児保健研究 .67（3）496–503.2008.
9）石井クンツ昌子．父親の役割と子育て参加―その現状と規定要因，家族への影響について―．季刊家計経済研究．81. 16–23. 2009.
10）Aldous J., Mulligan G.M. Fathers' child care and children's behavior problems. Journal of Family Issues. 23. 624–647. 2002.
11）加藤邦子，石井クンツ昌子，牧野カツコ，他．父親の育児かかわり及び母親の育児不安が 3 歳児の社会性に及ぼす影響―社会的背景の異なる 2 つのコホート比較から―．発達心理学研究．13. 30–41. 2002.
12）細野久容．乳幼児の母親を支える環境について―ソーシャルサポート、サポート源への母親の評価と育児満足度との関連について―．乳幼児医学・心理学研究 13（1）41–55. 2004.
13）小林佐和子．乳幼児をもつ母親のソーシャルサポートと抑うつ状態との関連．小児保健研究 67（1）96–101. 2008.
14）荒牧美佐子．育児への否定的・肯定的感情とソーシャルサポートとの関連―ひとり親・ふたり親の比較から―．小児保健研究 64（6）737–744. 2005.
15）小池はるか，大谷範子，池畠美和子，他．9 ヶ月児の母親の精神的健康に影響を与える要因の検討．小児保健研究 68（4）439–445.2009.
16）末盛慶，石原邦雄．夫の家事遂行と妻の夫婦関係満足感―NSFH（National Survey of Families and Households）を用いた日米比較－．人口問題研究．54（3）39–55. 1998.

17）李基平．夫の家事参加と妻の夫婦関係満足度―妻の夫への家事参加期待とその充足度に注目して―．家族社会学研究．20（1）70–80. 2008.
18）中川まり．夫の家事・育児参加と夫婦関係―乳幼児をもつ共働き夫婦に関する研究―．家庭教育研究所紀要．30. 97–109. 2008.
19）尾形和男．父親についての研究（Ⅵ）―共働き家庭における母親の育児に対する父親の協力と子どもの精神発達―国際学院埼玉短期大学研究紀要．14. 23–32. 1993
20）Brook JS., Brook DW., Whiteman M. Maternal correlates of toddler insecure and dependent behavior. J Genet Psychol. 164（1）72–87. 2003.
21）Chen YC., Chie WC., Chang PJ., et al. Is infant feeding pattern associated with father’s quality of life? Am J Mens Health. 4（4）315–322. 2010.
22）朴志先，金潔，近藤理恵，他．未就学児の父親における育児参加と心理的ウェルビーイングとの関係．日本保健科学会誌．13（4）160–169. 2011.
23）伊藤裕子 , 池田政子 , 川浦康至．既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的活動の影響．心理学研究．70（1）17–23.1999.
24）末盛慶．夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感－妻の性別役割意識による交互作用－．家族社会学研究．11. 71–82. 1999.
25）高燕，星旦二，中村立子．都市部青壮年女性の就業状態における生活満足感の規定要因に関する研究．社会医学研究．25. 29–35. 2007.
26）内閣府男女共同参画局．男女共同参画白書平成 25 年版．24. 2013.
27）杉山希美，後閑容子．父親の役割獲得に関する文献検討．岐阜看護研究会誌．4. 59–68. 2012.
28）Bartkowski JP., Xu X. Distant patriarchs or expressive dads? The discourse and practice of fathering in conservative protestant families. Sociological Quarterly. 41. 465–485. 2000.
29）Ishii―Kuntz M., Makino K., Kato K., et al. Japanese fathers of preschoolers and their involvement in child care. Journal of Marriage and Family. 66（3）779–791. 2004.
30）成瀬昴，有本梓，渡井いずみ，他．父親の育児支援行動に関連する要因の分析. 日本公衆衛生雑誌．56（6）402–410. 2009.
31）Milkie MA., Bianchi SZ., Mattingly MJ., et al. Gendered division of childrearing. Ideals, realities, and the relationship to parental well–being. Sex Roles. 47. 21–38. 2002.